Special Feature

特集◎アカデミック・ジャーナリズム

一人の読者から社会は変わる

ネット言論空間の可能性

芹沢一也＋武田 徹

気鋭の研究者の論考をインターネット上に公開している「シノドス」。その設立経緯と意図、そしてこれから目指すところについて芹沢一也編集長に本誌編集委員・武田徹が聞いた。

シノドスとは何か？

武田　ネットで少し専門的な事柄を調べようと思って検索をかけると、まずヒットするのは研究者の論文です。最近は過去の論文も含めてネット上のレポジトリに公開される例が増えています。

そしてもうひとつがシノドスです。研究者が一般向けに書いた記事が載っているし、ライターやジャーナリストの寄稿や取材記事もありますが、マス媒体に普段書いている仕事よりも専門的な領域に踏み込んで論を展開している。

2021年8月3日ZOOMで行われた。

『アステイオン』の特集はアカデミズムとジャーナリズムの間を埋め、両者を橋渡しする試みを紹介しようという内容ですが、シノドスはそれを前々からやって来られている先駆者でした。そこで、シノドスを主宰している芹沢さんにお話を聞いてみようと思いました。

ただ、ネットではずっと見てきましたが、シノドスの歴史については案外と知らないことが多い。今回改めて来歴を調べてみたのですが、始まりはセミナーの開催だったのですね。

芹沢　自宅のマンションのリビングで、サロンのような小さなセミナーを行ったのが、シノドスの始まりでした。二〇〇七年ですから、もう一五年近く前になりますね。ゲスト講師としてお招きしたのは、当時論壇で活躍していた若手の論客たちです。当初意識していたのは「論者のネットワーク」づくりでした。これが後にシノドスの核となります。

武田　荻上チキさんや経済学者の飯田泰之さんも設立メンバーだったのでしょうか。

芹沢　荻上さんが参加したのは、半年くらいたってから

Kazuya Serizawa

1968年生まれ。SYNODOS編集長。株式会社シノドス代表取締役。シノドス国際社会動向研究所代表理事。2007年シノドス設立、2008年メールマガジン「αシノドス」（荻上チキ編集長）スタート、2010年Web「シノドス」創刊。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門は日本近代思想史、現代社会論。著書に『〈法〉から解放される権力』（新曜社）、『狂気と犯罪――なぜ日本は世界一の精神病国家になったのか』（講談社＋α新書）、『日本思想という病――なぜこの国は行きづまるのか？（Synodos readings）』（共著、光文社）など多数。

ですね。彼のデビュー作『ウェブ炎上』（筑摩書房、二〇〇七年）を読んで声をかけました。当時、ウェブをめぐっては楽観論か悲観論の極端な議論が多かったのですが、彼は中立的に冷静な議論をしていたのが印象的でした。荻上さんが立ち上げたのが「αシノドス」というメールマガジンで、現在は電子マガジンとして配信しています。

飯田さんは、最初はセミナーの講師としてお呼びしたんです。彼の話を聞いて、経済学の知識は不可欠だと蒙を啓かれました。当時はむしろ、経済学者を資本主義の犬くらいに思っていました（笑）。人文系の人間にありがちな経済音痴です。その後、何十冊も経済学の本を読んで、勉強したのを覚えています。

そして、三人でシノドスを法人化したのが、二〇〇九年です。

武田　ウェブ化されるのは、二〇一〇年ですよね？

芹沢　WEBRONZA立ち上げの時に相談を受けたんです。アカデミアの研究者の記事を掲載したいのだけど伝手がないから協力してくれないかと。そこでWEBRONZAの中に「シノドス・ジャーナル」というコーナーをつくり、僕がそこの担当をすることになりました。

当初、朝日新聞さんからギャラをいただけなかったので、WEBRONZAのためにつくった記事を再利用してよいという話になりました。そこで、ミラーサイトのようなものをつくって、記事をアーカイブしたのですが、それが現在のウェブ「シノドス」の始まりです。

武田　同じ頃に『諸君！』も『月刊現代』も休刊になりましたが、『論座』はいち早くウェブ版で復活しました。「紙ではやっていけなかったけれど、ウェブならどうか」という考えが編集部にあり、芹沢さんにお声がけしたのでしょうね。

「知のインデックス」をつくる

武田　紙の論壇誌とは別にネットが論壇を支える、そんな考えで「シノドス・ジャーナル」をつくられたのでしょうか。

芹沢　「ネット論壇」という意識はありませんでした。シ

Toru Takeda

1958年生まれ。ジャーナリスト、専修大学文学部ジャーナリズム学科教授。国際基督教大学大学院比較文化研究科修了。大学院在籍中より評論・書評など執筆活動を始める。東京大学先端科学技術研究センター特任教授、恵泉女学園大学人文学部教授を経て、現職。専門はメディア社会論。主な著書に『偽満州国論』、『「隠蔽」という病い』（ともに中公文庫）、『流行人類学クロニクル』（日経BP社、サントリー学芸賞）、『原発報道とメディア』（講談社現代新書）、『暴力的風景論』（新潮選書）、『現代日本を読む――ノンフィクションの名作・問題作』（中公新書）など多数。

ONZAの中に「シノドス・ジャーナル」というコーナーをつくり、僕がそこの担当をすることになりました。

当初、朝日新聞さんからギャラをいただけなかったので、WEBRONZAのためにつくった記事を再利用してよいという話になりました。そこで、ミラーサイトのようなものをつくって、記事をアーカイブしたのですが、それが現在のウェブ「シノドス」の始まりです。

武田　同じ頃に『諸君！』も『月刊現代』も休刊になりましたが、『論座』はいち早くウェブ版で復活しました。「紙ではやっていけなかったけれど、ウェブならどうか」という考えが編集部にあり、芹沢さんにお声がけしたのでしょうね。

「知のインデックス」をつくる

武田　紙の論壇誌とは別にネットが論壇を支える、そんな考えで「シノドス・ジャーナル」をつくられたのでしょうか。

芹沢　「ネット論壇」という意識はありませんでした。シ

ノドスのネットワークをベースに、「知のインデックス」のようなものを作りたかったんです。

当時、僕は新聞に大きな期待を抱いていました。日本の新聞は、いまでもそうですが、とても多くの読者を持っていますよね。まさに「毎日のベストセラー」です。そうした媒体に、専門家のしっかりとした分析や解説が載るようになれば、読者のリテラシーも向上する、ひいては健全な民主主義の育成に資すると考えていました。

しかし、いわゆる識者として紙面に取り上げられていたのは、あまり事情に通じていない人たちだとも感じていました。そこで確かな「知のインデックス」をつくり、それがネット上にあれば、記者さんたちのお役に立てると思ったんです。

また先ほど武田さんに、検索するとシノドスの記事がヒットすると言っていただきましたが、それも当初目指した目標でした。多くの人がネットで情報を得ているにもかかわらず、ネットの情報は玉石混交、ほとんど石ですよね。ですので、検索でシノドスのような専門的な記事がヒットするというのは、とても意味あることだと思います。

当時と比べて現在では、信頼できる専門家がメディアで発言するようになり、そこにはシノドスでお書きいただいた専門家が多くみられます。こうした意味では、一定の役割を果たせたかなと思います。

武田　新聞社や通信社は、やはり締切りがありますから、スピード重視で「すぐコメントをくれる人」がリスト化されているのだと思います。私もその一人らしい(笑)。

芹沢　シノドスを始めたときに苦労したのは、良心的な研究者ほど、メディアで発言したがらないということでした。当時、「先生がメディアで発言しないと、代わりに専門性のない人が適当な話をします。それは、社会にとって害悪ですよね」と、説得したことを懐かしく思い出します。

武田　日本のジャーナリズム教育の問題点のひとつとして、よく言われていますが、OJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)がとても強くて、求められることは現場で育まれてきたやり方を身につけること以上でも以下でもない。

たとえば、アメリカでは記者がより高度な専門性を身につけるために一度、現場を離れて大学院に行き直す例が少なくないですが、日本ではそれはまだ少数です。大学院に行かずとも、学術論文を読む習慣を身につけていれば、研究の世界で本当に評価されている専門家が誰かもわかって、取材対象にしたり、寄稿を頼んだりできるのでしょうが、アカデミズムに触れずにキャリアを歩む人が多い。だからこそ、その部分を補うために「知のインデックス」であるシノドスのような存在が必要であるという認識なのですね。

芹沢　おっしゃる通りです。

武田　起用する識者の人選の素晴らしさがシノドスの強みの一つと思いますが、そもそもどうやって探されているのでしょうか。

芹沢　特別なことはしていません。本を読んだり、論文を読んで、面白そうだなと思った人にお声がけしたり、あるいは、このトピックを取り上げたいと思ったときは、書いていただけそうな方を探します。その場合は自分で調査したり、またシノドスの人脈を利用して探すこともあります。これまでシノドスにお書きいただいた人は一〇〇〇人以上、つまり巨大なネットワークがありますから、最適な執筆者を探すのはそれほど難しい作業ではありません。

武田　しかし、芹沢さんご自身に関心がないと、本も論文も探せないですよね。「時代を読んでいく」というような志があってこそできることだと思います。

芹沢　時代にあわせようという志向も、最初からありませんでした。僕はシノドスを「知のセレクトショップ」のような空間にしたかったんです。僕が一読者として面白いと思った著者たちを、ほかの人たちにもぜひ読んでもらいたい、という思いが強かった。

武田　「もうちょっと裾野を広くしないと、媒体としてやっていくのが大変」と一般的には考えると思うのですが……。

芹沢　それはあまりなかったですね。それよりも、執筆してくれる方たちが、安心して議論を展開できるような言論空間をつくることのほうが、僕にとっては大事でした。ここは本当に気を使いました。

「シノドス」以前――「知識人・文化人」への疑問

武田　芹沢さんは慶應義塾大学の大学院に行かれましたよね。その頃から、シノドスのようなメディアをつくりたいと思われていたんですか。

芹沢　いえ、全くありませんでした。僕は大学生の頃、バーテンダーだったんです。ほぼ毎日、夕方六時から朝の四時まで働いていました。大学にもほとんど行かず、就職活動もせず、そのままバーテンダーとして生きて行こうと考えていたのですが、バブルがはじけて不景気になって、夜の世界もとても厳しくなった。

そこで当時、精神分析や心理学に関心があったので、カウンセラーになろうと思って大学院に行きました。カウンセラーの業界を知る中で、精神科医の権力がとても大きいことに気づき、なぜなんだろう？　と不思議に思って、明治時代まで遡って精神医学と精神病院の歴史を調べました。

その成果を博士論文にしようと思い、副指導教官の指導のもとで完成した論文を指導教官のところにもっていったら、「僕はフーコーって嫌いなんだよね」の一言で却下されたんです。すると、それまで激賞していた副指導教官も手のひらを反して、「いや、僕もそう思ってたんです」とか言い出して（苦笑）。

で、当時、懇意にしていた日本文学研究者の小森陽一先生のところに持って行き、「先生、これを本にしてください」とお願いしたんです。それで出版したのが『〈法〉から解放される権力――犯罪、狂気、貧困、そして大正デモクラシー』（新曜社、二〇〇一年）です。

本を出したら一発逆転だな、とか安易なことを考えていたのですが、当然、そんなこともなく、定職にもつかずブラブラしていました。そんなある時、偶然知り合った方に飲み屋で、「あんた一体これからどうするの？何だったらできるの？」と聞かれ、「本なら書けるかな」と言ったら、講談社に連れて行かれて。それで、「この人に本書かせてあげて」とお願いしてくれたんです。

なぜオッケーが出たか今でも謎ですが、『狂気と犯罪――なぜ日本は世界一の精神病国家になったのか』（講談社＋α新書、二〇〇五年）を出すことができました。この本が評判になり、二冊目『ホラーハウス社会――法を犯した「少年」と「異常者」たち』（講談社＋α新書、二〇〇六年）も出しました。

ところが、印税で食べていくのはとても難しい。「そうか、ある程度有名になってもだめなんだ。これはまずいな」と気づきました。

武田　印税計算だと今は本の刷り部数が更に減っているので収入はもっと少ないかもしれません。

芹沢　そうした生活上の問題もあって、シノドスの立ち上げに向かって行きました。ただ、このあたりになると、言論人としての社会的使命のようなものも芽生え始めていました。

二冊目の新書を書いたとき、少年犯罪について調べたのですが、九〇年代半ばに大きなターニングポイントがあります。有名な酒鬼薔薇事件が起こり、少年犯罪をめぐる議論が盛り上がる中で、「凶悪な少年犯罪が急増している。少年事件には厳罰で臨まねばならない」という世論が急速に形成されていきます。

当時の状況を振り返ると、きわめて興味深いのが、いわゆる識者や評論家、文化人といった、少年事件に専門的な知識をもたないオピニオンリーダーたちが世論を醸成していたことと、それからその当然の帰結として、だれもデータを見ていなかったことです。

酒鬼薔薇事件の発生をみて、「子どもたちは理解不能な存在に変質してしまい、いつなんどき人を殺すか分からない」というような論調だったのですが、統計をみると、事件が起こった時点での少年事件の殺人件数は戦後二番目に少なかったんです。つまり、話はまったく逆で、子どもたちはかつてなくおとなしくなっていた。当時の識者たちは、不正確な現実認識をもとに、もっと言えば、妄想をもとに議論していたわけです。

シノドスはこうしたメディア状況に対するアンチテーゼとして立ち上げました。有名な評論家や文化人が何についても語るというのではなく、それぞれの専門家がそれぞれの専門について語る。そうすることで、「知」を複数の専門家が支えるネットワークとして機能させたいと考えました。

「アカデミック・ジャーナリズム」とシノドス

武田　本誌今号の特集は「アカデミック・ジャーナリズム」をキーワードにしていますが、シノドスもかつて「アカデミック・ジャーナリズム」を名乗っていた時期がありました。しかし、今はその看板は下ろしている。そのあたりの変遷についてお聞かせいただけますか。

芹沢　シノドスをやりながら、だんだんと時事から距離を置きたいと考えるようになっていきました。

シノドスに掲載されている記事は、執筆者のみなさんがものすごい熱量をもって書かれている記事です。しかし、時事に絡むと短期的に消費されてしまいます。しかも、そのスパンが年々、短くなっています。

情報が完全にフローになってしまっていて、僕はこのトレンドに抗いたくなりました。こんなに素晴らしい記事が、一日か二日読まれておしまい、という状況に耐えられなくなってきました。一生懸命書いてくれた先生たちに申しわけなくて……。それでも、シノドスの記事は寿命が長くて、他のメディアの記事に比べたらロングテールで読まれる傾向にありますが。

今はシノドスが変化している過渡期にあるので、まだ全体を見通せていませんが、知をストックとして機能させるにはどうすればよいのかを、ここ数年ずっと考えています。

橋本努さんと一緒に去年から始めた「トークラウンジ」も、そうした関心に基づくものです。これは新刊を出された著者を招いて、一般参加の読者とともにお話を伺うというオンラインイベントですが、書籍という知のストックに人々を誘う回路を増やそうという試みです。吉田徹さんや志田陽子さんという素晴らしい仲間を得て、少しずつ大きくなってきています。

改めて思いますが、本は偉大な知のパッケージですよね。それに、本が読まれない社会が創造性豊かであるはずがありません。とくに未来の社会をつくる若い人たちには、一冊でも多くの良書を読んでもらいたい。ですので、高校生、大学生、大学院生は無料にしています。

それから、僕はFREAKONOMICSというアメリカのポッドキャスト（ラジオ版「ヤバい経済学」）をよく聞くのですが、「自殺の矛盾」や「男女の違い」、あるいは「政治を腐敗させない方法」などといった、社会や経済にまつわる身近なトピックを、行動経済学や統計学の専門家へのインタビューを交えて、分かりやすく語っています。

こうしたミドル・レンジのトピック、つまり時事を読み解くのにも役立つという意味ではジャーナリスティックですし、また教養として一般的な関心の対象にもなりうるトピックを取り上げて、アカデミアの専門家と一緒にコンテンツをつくれば、ストックとしてロングテールで読まれる「アカデミック・ジャーナリズム」になるのではと考えています。

武田　財政面はどうでしょうか。広告収入を求めてPV（ページビュー）に依存すると「たくさんアクセスを増やせばいい」と考えて内容の質を軽視するようになってしまう。そうならないためには経済的に自立しなくてはならないと以前に書いておられましたが、その後はどうでしょうか。

芹沢　そこがウェブメディアのアキレス腱です。たまに志の高いメディアが出てきますよね。ですが、一年もたつと、芸能やスポーツなど、エンタメ記事ばかりになっていたりする。

これはウェブメディアの収益構造上、不可避です。広告がクリックされることではじめて収益が上がるシステムなので、読者を集めるのが至上命題となります。

たとえば、社会的に意義のあるインタビュー記事を一週間かけてつくっても、大して読まれずにペイしません。ところが、ワイドショーであの芸人はこんなこと言ったみたいな一〇分くらいでつくった数百字のいわゆる「こたつ記事」は数十万人、うまくいけば数百万人に読まれるわけです。ウェブメディアもビジネスなので、当然、そちらに流れていきます。

シノドスはそういった潮流にはことごとく逆行しているので、マネタイズは容易ではないですね。ただ、良質な言論は公共財だと考えているので、それを提供することは社会貢献だと思って続けています。

コミュニケーターが支える専門性

武田　シノドスにはロングテールで読まれるコンテンツがあると先ほどおっしゃいました。多くは読まれずとも長く読まれるコンテンツを含んだアーカイブ全体で経済的にうまく回していくことはできないのでしょうか。

芹沢　硬派な記事は広告単価が安いんです。仮にシノドスのある過去記事が、何かの拍子である日、一万PV集めたとして、おそらく数百円くらいではないでしょうか。マネタイズということを口にできる数字ではないですよね(笑)。

　実はシノドスを立ち上げたとき、僕にはひとつ夢がありました。

　アカデミアでの就職状況は厳しく、現在、多くの優秀な人材が大学で職を得ることができません。日本では、企業もポスドクを採用したがりません。彼らを集めて、各自の専門性を生かしてコミュニケーターとして働いてもらえば、すごいメディアがつくれると思います。いまぼくがシノドスでやっていることを、チームでやるイメージです。

　しかし、たとえば一〇人のチームをつくったとして、一人年俸五〇〇万円でお願いしたら、トータルで五〇〇〇万円。社会保険料を入れたらもっと膨らみます。その金額をアカデミックなメディアが稼ぎ出すのは至難の業なので、やはり僕一人で何とかやれるぐらいのレベルになってしまいます。

　ただ、コミュニケーターは何らかの形で実現されて欲しい。現在は、経済も医療も教育も、すべての領域で高度な専門知識が必要です。健全な社会的コミュニケーションのために、コミュニケーターは不可欠だと思うんです。

武田　コミュニケーターの必要性は科学分野でよく議論されています。僕ももちろん必要だと思っているのですが、コミュニケーターは専門家の言語を一般人に通じる言語に翻訳するという、「翻訳モデル」です。それに対してジャーナリズムは、そこに時代に対する何らかの位置づけや社会に対する位置づけを加える。そうでないと、ジャーナリズムにはならないと思っています。つまり、「コミュニケーター・モデル」と「ジャーナリスト・モデル」は異なるという話を僕はよくしています。

芹沢　おっしゃる通りだと思います。問題は、先ほど武田さんが言われたように、日本には専門性を身につけたジャーナリストが少ないことですね。そして、事実認識のレベルで歪んでいれば、その上で展開されるジャーナリズムは筋のよいものにはなりえません。そうであれば、事実を伝えるだけの「翻訳モデル」だけのほうが、はるかによいと思います。

武田　今、シノドス自体は旗印として上げておられませんが、やり方次第でアカデミック・ジャーナリズムの可能性はまだあるとお考えでしょうか。

芹沢　専門性をキープしつつ、時事的なことに即応することがアカデミック・ジャーナリズムだとすれば、やはり特別なチームが必要です。

　チームさえあれば、難易度はそれほど高くないはずです。先ほど申し上げた専門性を身につけたポスドクの方たちが、専門家にzoomでインタビューすれば、その日か、翌日には高いレベルの記事が出せるでしょう。また、海外の研究者にどんどんインタビューをして、それを翻訳するのもいいと思います。そうすれば、日本で流通する記事のレベルも上がるはずです。ネックはお金だけです。

イデオロギーベース vs エビデンス・ベース

芹沢　ただ、お金がないことをいっていても始まらないので、いまできることを進めていこうと考えてます。

　ひとつ考えているのは、『FACTFULNESS(ファクトフルネス)』(日経BP、二〇一九年)にインスパイアされたアイディアです。

　やはりいろんな場面でそもそもの現実認識が歪んでいると感じることが多い。そこで、正しい現実認識のために不可欠なデータとその解説を、短い記事にまとめてネットに著作権フリーで置くことを考えています。記者もジャーナリストも、ブロガーも、誰でもコピペ自由です。

　三・一一と第二次安倍政権の頃から、左派やリベラル

と言われる人々がファクトベースではなく、イデオロギーや感情ベースになってきていて、ぼくはこれをとても憂慮しています。「安倍政権」や「菅政権」のような敵をつくってそれを叩く。政策のパフォーマンスをデータで確認し、評価すべき部分はきちんと評価し、修正すべき部分は対案を出していく、という態度からほど遠い。権力批判を先鋭化する中で、どんどんマジョリティの支持を失っている。

二〇一七年に、橋本努さんや吉田徹さん、富永京子さんと、「シノドス国際社会動向研究所」を立ち上げましたが、それはこうした傾向を危惧したためです。たんなる権力批判で留飲を下げるのではなく、建設的に社会をかたちづくる意志を持った「新しいリベラル」の像を打ち出そうと試みています。

また研究者と企業で働くプロボノが、共同で社会調査をし、社会提言をする「Social Action Tank」という組織を、橋本努さん、坂口緑さん、蟹瀬生馬さんと一緒につくりました。これもアカデミアと社会を架橋する試みのひとつであると同時に、市民社会をアップデートする試みです。

武田　データではなく、自らの思想信条に基づいて政治的な振る舞いをするようになってきている。学術はそれでは困るのであって、ファクトベース、エビデンス・ベースでないといけない。その点はジャーナリズムも同じはずなのですが、こちらも実際はずれている。「エビデンス・ベースド・ジャーナリズム」ではないものが、結構あります。

芹沢　教育が典型的ですよね。「エビデンス・ベース」ではないために、政策が評価も検証もされないまま、その時々の論調で変えられていく。こうした現状を変えることができるのは、やはりメディアです。メディアが政策をエビデンス・ベースで検証し、評価してくれれば、かなり健全になるはずです。

武田　なるほど。もし「アカデミック・ジャーナリズム」という言葉が成立するのだとすれば、一つは改めて「エビデンス・ベースド・ジャーナリズム」を究めようとするジャーナリズムかもしれないですね。シノドスでも「エビデンス・ベース」で、潮流を変えるようなエポックメーキングな論考はありましたでしょうか？

芹沢　いくつもありますが、とくに経済と福島の問題ですね。

シノドスでは最初期から、日本経済の問題はデフレだと主張してきました。現在、日銀の審議委員をされている片岡剛士さんがデータに基づいた記事を数多く書いてくれたおかげで、この認識はだいぶ広まったと思います。当時は多くの人がデフレが問題だとは認識していませんでしたから。

また福島については、フリーライターの服部美咲さんが、福島の放射能問題について、科学的に裏打ちされた記事をたくさんつくってくれました。原発事故については、幸運にも被害が最小限で済んだ、というのが科学的な評価です。ところが、こうした評価は国や東電を利すると、左派やリベラルにだいぶ叩かれました。

しかし、データで現状を把握することと、国や東電の責任を追及することは別なことです。言うまでもないですが、後者の権力批判のために、前者の科学的な分析が歪められてはなりません。

武田　二〇〇七年から始められて時間がたちましたが、世代交代についてはどうでしょうか。

芹沢　三〇代の書き手が増えてますね。

武田　書き手の世代が若返るというのは、実はすごいことです。多くのメディアが、一度読者を獲得した書き手とずっと一緒にやってゆこうとします。書き手を変えて読者を失うのが怖いからという安定志向の結果です。どんどん新しい書き手を探していけていることは、シノドスの若さを保つ秘訣ではないか。そのあたりのコツは何かあるのでしょうか。

芹沢　原稿を依頼したときにいただくプロフィールをみてはじめて年齢を知ったりするなど、そもそも書き手の年齢はまったく気にしていません。結果的に書いた人が若かったり、そうでなかったりという感じです。

武田　文章から入るとそういう結果になるのかもしれません。今に通用するような、面白いものは若い人が書いているということですね。

教養の在り方

武田　教養が失われたといわれる時代にどう向き合うべきか。シノドスはどう考えて運営されているのでしょう。

芹沢　かつて僕が大学生だった一九八〇年代の終わりから九〇年代にかけては、教養主義のプレッシャーのようなものはまだ残っていました。ぼくも専門とはまったく関係ないのに、明治以降の日本の小説はほぼ読みましたし、また西洋哲学や古典的な文学もだいぶ読みました。いまでもぼけっとネットフリックスをみていると、「いかんこんな時間があるならドストエフスキーでも」と、ちらりと思ったりします(笑)

いまではそうした大正教養主義的な雰囲気はすっかり失われましたから、そうした意味では、シノドスは「ポスト教養」の知だということになるのでしょうね。

武田　教養小説、つまりビルドゥングス・ロマンが大正教養主義の象徴ですね。しかし、人格形成の糧にならないとしても、何か物を考えるときに拠って立つ基本的な枠組みとしての教養や、それを使って考える能力は今でも必要ですよね？

芹沢　そうした意味では、シノドスはツール型の教養だと思います。

ただ、シノドスは思想系の記事にも力を入れています。とくに先にふれた電子マガジン「αシノドス」では、哲学的な記事を多く掲載しています。データを眺めていても理想の社会を「想像＝創造」することはできません。理念という部分は、哲学的な議論によって鍛えられる必要があります。

哲学や思想に裏打ちされた理念と、科学的なデータによる現状認識の両輪が、やはり必要なのだと思います。

武田　知識人の在り方の変化についてはどうお考えでしょうか？

芹沢　あらゆる問題に関して社会に向けて発言するような大知識人は、現在ではありえません。いたとしたら、それは間違いなくフェイクです。専門が違えば、学者として素人と変わりませんから。

高度に専門的な知識が求められる現在では、知識人はそれぞれの専門知識を背景に、部分的に機能することしかできないし、それが望ましいと思います。

武田　専門性を備えていた知識人が社会にコミットできた時代は終わり、「ポスト知識人」は専門性を背景にせずに幅広い分野で気の利いたコメントをしてくれる「評論家」ということでしょうか。

今やテレビのコメンテーターの多くは専門知とは無関係で庶民の感情、怒りや憤慨を代弁してくれる人ですよね。一方で「専門知」は、ご指摘のように今やかなり細分化しているので、横断的に何か言える人はあり得ない。ですから、専門家と、その専門化した知識を伝えてくれるようなコミュニケーターをセットでこれからは考えていくべきというお考えでしょうか。

芹沢　言論の生産側としては、そうした形が理想的だと思います。ただ問題は、昨今、専門知への人びとの信頼が下落していることです。

トランプ前大統領のようなポピュリストが科学や専門家を攻撃したのが象徴的ですが、感情を動員する政治が現在のように広まると、専門的な知識に基づいた冷静な議論というのは分が悪い。

ダニエル・カーネマンは人間の脳には、「システム1（早い思考）」と「システム2（遅い思考）」の二つの回路があるとしましたが、人はシステム1、つまりは直感や経験に基づいて、日常生活で大半の判断を下しています。

感情を動員する政治はシステム1に働きかけますから、システム2、つまり理性に向けて、データに基づく議論で訴えても勝ち目がありません。

現在、ナッジのような行動デザインに注目が集まっているのもそうした理由からでしょう。理性に働きかける啓蒙は難しいので、直接的に行動のレベルによき影響を与えるような環境をデザインしようということです。

「アカデミック・ジャーナリズム」の今後と「ネット論壇」

武田　『アステイオン』は「専門知」を専門家共同体の中に留めずに広く届けようとしているメディアだと思っています。「シノドス」にも同じ志を感じますが、個人的にはそうした活動の必要性はこれから増すことはあっても減

ることはないと思っていますが、どうでしょう。

芹沢　そうですね。ただ、シノドスは最初から、多くの読者を獲得しようと考えていませんでした。数万人に読んでいただければ、それで十分だと思っていました。

　大切なのは読者の数ではないと思います。シノドスの記事を読んで、何かを感じてくれて、高い志をもって行動する人が、たとえ一人であっても生まれてくれれば、ぼくはシノドスをやった甲斐があったと思うことができます。実際に、社会は一人の力でけっこう変わるものです。そして、それは『アステイオン』も同じではないでしょうか。

武田　インターネット上の言論空間についてどう思われますか？

芹沢　インターネットの問題はＳＮＳ、とくにツイッターです。以前であれば、たとえば飲み屋でくだを巻いていたのが、そのままのメンタリティでツイートをしているようなものです。それがあれだけの膨大な数の人間によって行われると、ひとつの巨大な世論を形成してしまいます。そして、それがときに非常に暴力的な形で表出する。

　僕は、ＳＮＳは規制されるべきだと思います。よく市場になぞらえてネットの自由を擁護する人たちがいますが、市場というのは数多の規制の上に成り立っています。今のネットは、たとえれば飲酒運転やものすごいスピードで走っても捕まらないような、きわめて無秩序な状況だと思います。

武田　それは、言論のある部分を規制していくということでしょうか。批評的な言説と誹謗中傷的な言説は、時々見分けにくいところもありますよね。

芹沢　おっしゃることは分かります。ただ、とくにツイッター上に現れる誹謗中傷や暴力的な言動は、もう待ったなしで取り締まられるべきだと思います。

武田　たとえば今、コロナの感染予防のための社会的合意が必要とされる議論は、平時に落ち着いてすべきですよね。危機の渦中でまともな議論ができるほど人間は成熟していない。言論規制も同じで急ぐ必要は理解できますが、混乱した状況の中で議論することに危うさも感じてしまいます。

芹沢　とはいえ、今後はたしてネットが冷静さを取り戻すことはあるのか、ですね。

武田　ゆっくり急ぐ境地でいたいものです。そろそろまとめに入りたいのですが、実は、シノドスは「ネット論壇」を目指すのだろうと思っていましたが、先ほどそのつもりはないとおっしゃった。確かに話を聞いてみたら、むしろ「専門知を提供するシンクタンク的なメディア」を志向されている印象を受けました。

芹沢　それが近いですね。かつての総合雑誌の時代であれば、『中央公論』や『世界』に掲載された論文や対談を、新聞や他の雑誌が取り上げる中でつくり出される言論空間が、論壇を支えていました。

　それはネットのような外部がなかったからこそありえた、ある意味とても幸せな時代です。現在はそうした空間は完全に失われました。かつての論壇のような求心性をもった言論空間を、ネットで再現することはできないと思います。

　そして、それは言論が民主化された結果でもあります。論壇はエリートたちが言論を支配していた時代の象徴です。どんな権威のある人間が書いた文章でも、すぐさまネットで無名の人々に批判的に検証される現在の状況はきわめて健全ではないでしょうか。その健全な部分をいかに意義のある社会変革に結びつけていくのか、ここがいま問われているのだと思います。

武田　『アステイオン』の場合、刊行サイクルが長いので論壇の短期的な動きに即応することはできない事情があります。そこでもネットメディアでありつつロングテールを意識している「シノドス」とは反対の一致のような結果になっていますし、エビデンス・ベースの専門知を、現実には限られた読者かもしれないけれど、少なくともマインドの上では専門家集団の狭さを越えて届けようとするという点でも共通性があり、なにか一緒にできることもあるのかもしれないと思いました。シノドスの経験から『アステイオン』が学ぶこともたくさんあるはずですね。お忙しいところ、お時間いただき、本当にどうもありがとうございました。

アステイオン

095
2021

鋭く感じ、柔らかく考える ASTEION

特集

アカデミック・ジャーナリズム

敷と独立 ● 東 浩紀

「アカデミ・ジャーナリズム」の試み ● 大治朋子

ポピュラー・サイエンスという方法 ● 下山 進

「専門知」を「臨床知」で乗り越える
● 渡辺一史＋小川さやか＋武田 徹

一人の読者から社会は変わる ● 芹沢一也＋武田 徹

アカデミック・ジャーナリズムの「高度成長」
● 山本昭宏

知のアリーナを支える
● 大内悟史＋小林佑基＋鈴木英生＋田所昌幸＋武田 徹

「良き仲間」としてのアカデミック・ジャーナリズム
● 開沼 博